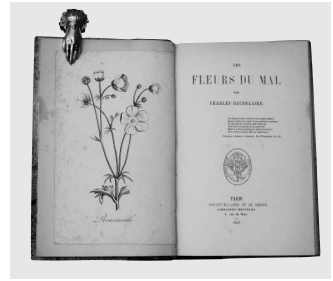


佛蘭西書巡覧 11

平山 弓月

『悪の華』と題されたこの小さな一巻は、300ページにも満たないのだが、文学に通じた人々の評価というものの中で、最も華々しく最も壮大な作品に見合っている。

ポオル・ヴァレリイ



秋の夜長にフランスの詩集を繙いてみてはいかがでしょう。

言葉を使って表現する芸術家の中で、最も文学性が豊かなのが「詩人」といわれてきました。一行の「音」の数や、全体の行数、そして脚韻といった、さまざまな約束事を満たしながら、「言葉」の持つ美しさを極限まで追求し、完成されたものが「詩」になるのですから、この評価もうなずけます。

そういうわけで、今回はシャルル・ボードレール **Charles Pierre Baudelaire(1821-1867)** の『悪の華』 **Les Fleurs du mal(1857, 1861)** を紹介しましょう。詩人の作品は上田敏や永井荷風らによって、早くから日本語に移されていますし、また詩人の生涯についても詳しく紹介されていますので、ここでは詩人ボードレールや、高名な『悪の華』出版にかかわる様々な事には触れないでおきましょう。

まずは詩を読んでみてください。できれば声に出して読んでください。

Bientôt nous plongerons dans les froides térébres;
Adieu, vive clarté de nos étés trop courts !
J'entends déjà tomber, avec des chocs funèbres,
Le bois retentissant sur le pavé des cours.

(Chant d'automne)

われらまもなく冷たき闇に沈むらん。
いざさらば、束の間なりしわれらが夏の強き光よ！
われ既に聞く、中庭の整石（いしだたみ）に
悲しき響を立てて枯枝の落つるを。

(「秋の歌」村上菊一郎訳)

ここに引いたのは、二部構成全二八行の詩編の冒頭四行です。一行二音綴りで、こういう詩形をアレクサンドランといいます。その上一行はだいたい六音六音でリズムが構成されます。さらに一行目と三行目、二行目と四行目の最後の音が同じで響き合っています。これが脚韻という約束なのです。これだけの約束事を守りながらも、そんなに難解な語を使うことなく詩句を練り上げているのです。フランス語の初級文法を終えただけで、この美しい詩行を完全に理

解できるのです。かえって村上菊一郎の日本語の方が現代のあなた方には難解かも知れません。

東京帝国大学の初代仏文学教授であった辰野隆は、「ポオドレエルは巴里兒である。巴里で生れて、巴里で死んだ」と書いています。秋の迫りくるパリで、たとえばシャンゼリゼの並木の下でこの詩を読めば、詩人の感情により一層近づくことができるのかもしれませんが、時間的にも空間的にも遠く離れたここ京都で読んでも、この詩の素晴らしさは変わらないと思えます。すなわちそれが古典というものであり、ボードレールの普遍性というもののなのでしょう。

もうひとつ別の詩を読んでみましょう。先に引いた詩とは脚韻の踏み方が違っていますが、形式は同じです。アレクサンドランという形式は、フランスの詩形としては最も美しい形式なのでしょう。こちらも是非声に出して読んでみてください。

Quand, les deux yeux fermés, en un soir chaud
d'automne,

Je respire l'odeur de ton sein chaleureux,
Je vois se dérouler des rivages heureux
Qu'éblouissent les feux d'un soleil monotone;

(Parfum exotique)

暖かき秋の夕べに、わが兩の眼（まなこ）を閉じて、
ほてりたる汝（なれ）が乳房の香を嗅げば、
ひといろの灼熱の陽（ひ）の眩ゆく照る
楽しき岸邊ひろびろと浮びくるなり。

(「異國の馨」村上菊一郎訳)

やはり詩は、それが定型詩ならなおさら、声に出してこそその美しさが現れることがお分かりになられたでしょう。上演を目的として書かれた、フランス古典演劇から近世の劇作品にいたるまで、台詞がおもにアレクサンドランという定型詩の形式で認められているのもうべなるかなと納得させられます。

言語の学習習得を目指している諸君は、「ことば」の持つ音声の美しさにぜひ目を向けて下さい。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)